

## 映画監督木下恵介に関する考察 A Study of a Japanese Film Director, Keisuke Kinoshita

朱 丹陽  
Tanyo SYU

### I はじめに

改革開放実施から40年近く経った今日の中国経済は2013年にはGDP国民総生産が米国につぐ2位となり、人々の生活レベルも大きくレベルアップしています。それに伴い人々を取り巻く社会と生活の環境は大きく変化しています。国や人々はより自由により開放的になっていく代わりに日常生活では人と人を結ぶ社会的絆は猛スピードで変化し、破壊の一途を辿っています。核家族の増加、近隣における人間関係の冷淡化がそれに拍車をかけているように思われます。その結果、人の命が粗末にされる事件をしばしば耳にすることがなっています。新しい時代に突入した中国社会は、新しい人間関係の対応に戸惑っているように見えます。

人々に娯楽を提供する一方、現在の社会を反映するとされる映画ですが、今日の中国映画の現状はどのようになっているのでしょうか。1990年代からずっと続いていた中国映画の停滞は、2000年に入って一転し、好調を続けています。大作、3D映画、アクション、アニメ、コメディなど、いままでにない形態が出揃い、動員数が年々記録的に更新されています。2014年時点では、興業収入が300億元（6000億円）、スクリーンの設置数は2.5万枚に達しています。また映画の本数は、「2012年時点650部を超え、映画大国に仲間入りをしました」<sup>①</sup>。アクション、ホラー、3Dに対する投資が莫大で、そのうちビジョンを中心とした大作がほとんどです。社会問題や人々の関心事をテーマとして設定し、積極的に問題を解決し社会の改善に努めようとする作品が少なく、上質な作品が少ないのが現状です。これについて国内からの批評は鋭く、「中国映画は今の時代に十分追いついていない」と、中国共産党の機関紙「人民日報」（2015年3月 两会特刊）は、そのあり方について疑問を投げ掛けています。1978年に実施した改革開放が40年近く経過し、1998年の北京五輪後の高度成長を成し遂げた中国では、政治、経済、文化、生活スタイルが大きく変化した結果、人間関係、家族愛、人々との絆などの問題が顕在化してきたことがその背景にあると考えられます。若者の憂鬱病、老人の孤独、人間関係の冷淡化などが目立っています。さらに子供の人身売買、自分の子供に対する虐待と殺害、弱者へのいじめ、同級生に対する毒殺、農村部における留守番をしている子供に対する安全問題など、多くの問題を抱えています。これらの問題について、いままでにない繁栄振りを見せている映画市場で真剣に取り上げられていないことは、まことに残念なことと言わなければなりません。中国の映画の投資家や監督を含めた映画関係者の良心が問われ、監督としてのマインドや表現テクニックが時代とマッチしていないと言えるでしょう。その阻害要因として、中国における発展的段階、イデオロギー、管理制度などが関わっており、複雑に絡んでいるため、問題解決を遅らせています。

一方、同じ東洋に属する国として敗戦直後の停滞から立ち直り、高度成長を遂げ、先進国の仲間入りをした日本では、社会問題を取り上げた作品および人間の絆をテーマとした作品とされる「君よ憤怒の川を渡れ」、「人間の証明」、「砂の器」、「幸せの黄色いハンカチ」が作られ、それらの作品はその大胆かつ繊細なタッチで、1980年から1990年代にかけて、中国でセンセーションを巻き起こし、全国の観客を魅了しました。さらに国内の監督に大きな影響を与え、改革開放後の中国映画の発展に大きく貢献しました。中国にはいまだにこれらの映画に匹敵する作品は存在しません。映画の製作や経営などでずっと進んでいる日本映画に見習うべきだと思います。

### II 新中国建国後の日本映画界との交流について

新中国建国後の映画界は日本映画界との交流を重視し、「日本映画祭り」や合作などを通じて日本映画の

優れた理念を学んできました。1949年の新中国建国や1978年の改革開放政策の実施にあたり、日本映画は中国映画の発展を大きく促しました。とくに1980年の影響力は特筆すべきものでした。1950年代から中国で上映された日本映画は、「箱根風雲」、「生きる」、「太陽の無い街」、「二十四の瞳」などの作品が該当します。戦後の日本映画は、洋画から技法を吸収しながらその表現力を充実させてきました。またテーマとしては普通の人の願いや人間の絆を重視している点に中国の映画人は共感を覚えました。しかし1966年から1976年までの10年間は中国では文化大革命（略称文革）の時代でした。その結果、政治や、経済、文化に対する影響とともに日常生活では資本主義国家の書籍や新聞、映画、ドラマ、ファッションなどに対して批判がなされ、輸入禁止の措置が取られました。その結果、日本映画を含め資本主義の国家の映画は一切上映禁止となりました。1976年に文革が終わり、改革開放が実施されるようになりました。1978年、改革開放政策実施、真っ先に輸入解禁された資本主義国家の映画は日本の映画で、「君よ、憤怒の川を渉れ」（中国名「追捕」）でした。中央指導層から庶民層までが注目し、センセーションを巻き起こしました。その後、「あ、野麦峠」、「遠い山の呼びかけ」、「人間の証明」、「砂の器」、「愛と死」、「望郷」、「幸せの黄色いハンカチ」、「風立ちぬ」「HUANGHUの人」が、1980年代後半にかけて中国に紹介され、上映されました。日本映画の研究者の劉文兵は「映画『二十四の瞳』について『人民日報』をはじめ、多くのメディアに取り上げられ『日本軍国主義政策は、中国人民に災難をもたらしたばかりでなく、同時に日本人民にも災難をもたらした』<sup>②</sup>と紹介したうえで、「日本映画は、中国の映画人にたいして、題材のみならず、技法面においても多大な影響を与えたのである」<sup>③</sup>と述べています。さらに、純愛、友情、女性の生き方と若者の生き方、認知症患者の介護などの身近なストーリーを通して新しい時代を迎える中国人、とくに若者に対しアピールするものでした。日本映画を通して新しい時代に立った中国人の視野を広げ、新しい生き方の学び・選択の際に参考になったと言えます。現在国内外で活躍している「赤いコーリヤン」のチャンイーモや「霸王別姫・さらば我が愛」の陳凱歌、馮小剛などの作品からも日本映画の影響を認めることができます。

このことから、激変している時代とそれを生きる人々の揺れる心、これをどう見極め、表現するかという今日の中国映画が直面する最大の課題やその解決の糸口を日本映画に見出すことができるのではないかと考えます。庶民の気持ちや人々の絆を大事にする作品の中に、今日、激変の環境で戸惑っている庶民が求める慰めや生きるためのアドバイスが得られるのではないかと思うようになりました。その課題を解決する糸口が木下恵介監督とその作品に隠れているのではないかと思います。

作品が製作されて半世紀過ぎた今日、中国人の私が見てもなぜ木下作品に感動するのかを含めて、その作品の研究を通じて映画が訴える真の意味について極めたいと思います。

### Ⅲ 木下恵介監督を取り上げた理由について

1946年3月に復刊した『キネマ旬報』によると、投票で決める日本映画作品トップテンで1位に選ばれたのが木下恵介監督の「大曾根家の朝」でした。以来、「二十四の瞳」（1954年1位）「女の園」（同年2位）「楢山節考」（1958年1位）などが選ばれています。さらに監督として「戦後ベストテン入選監督ベスト50日本編」では4位に、黒澤明、山田洋次、今井正について選ばれています。また多くの賞を取り、黒澤明監督とともに戦後の日本映画を牽引する巨匠の一人とされています。1943年のデビュー作「花咲く港」は、黒澤明とともに山中貞雄賞を受賞しました。1951年の日本初の長編カラー映画となる「カルメン故郷に帰る」は日本映画文化賞を受賞しました。1954年には「二十四の瞳」でブルーリボン賞作品賞、毎日映画コンクール日本映画大賞及びゴールデングローブ賞外国語映画賞を受賞し、本作品は木下恵介監督の代表作の一つになっています。1958年の「楢山節考」はヴェネツィア国際映画祭において受賞はできなかったものの、フランスの映画人に絶賛されました。

トップテンに選ばれた作品や受賞作を含め、またその他の生涯に製作した全49作品を通して共通している登場人物は、ごく普通の人々で、港の住民、都市部の片隅で暮らしている市民、辺鄙な街に住む教師、教え子とその家族、芸術に対し献身的な若い女性、一人で二人の子供を育てる母親などです。そこで暮らしている人々は生きるための喜怒哀楽を素直に表現しており、木下恵介監督はそれらの人間的絆について描いています。これこそ今の中国映画にもっとも欠けているものと思われます。「映画は大衆以外のものではない」<sup>④</sup>。また「私はこれまでつましく生きる庶民の情感を、映像を通して描いてきた」<sup>⑤</sup>と、木下恵介監督

自身が証言しており、木下恵介監督の作品を取り上げることにより今後の中国映画のあり方を考える参考になるのではないかと考えたからです。

#### IV 木下恵介監督について

日本では1950年代が日本映画の黄金期と呼ばれています。この黄金期を牽引した二人の監督がいます。木下恵介と黒澤明です。

木下恵介監督については、次のような解説がなされています。

「木下恵介は1912年12月に静岡県浜松市生まれ。浜松工業学校、オリエンタル写真を経て、1933年に名門大卒しか採用しない松竹に採用され、浦田撮影所現像部に入った。島津保次郎監督の撮影助手、島津監督や吉村公三郎監督の助監督を経て、1943年に監督。1941年1月に補充兵として、中国の中心部にある大都市武漢などに入るなどして、前線への武器輸送を担当していた。この年8月負傷で招集解除とされ帰国、映画活動を再開」<sup>⑥</sup>

「1950年代は戦後日本映画の黄金時代とされています。戦前の話題作「陸軍」はもちろん、戦後から1960年代まで、「二十四の瞳」(1954)、「日本の悲劇」(1953)、「カルメン故郷に帰る」(1951)、「女の園」(1954)、「檜山節考」(1958)、「喜びも悲しみも幾歳月」(1957)など、名作を続々打ち出しました。黒澤明監督と肩を並べ、戦後の日本映画を大きく引っ張り、双頭の鷲とされています。しかし、黒澤明監督は米アカデミーやベネチア映画祭、ベルリン映画祭など賞を取り、美しい映像や個性のある人物の演出家として内外でよく知られているのに対して、木下監督は現在は日本では黒澤明監督ほどの知名度ばかりか、忘れかけているようです」<sup>⑦</sup>

#### V 先行研究について

##### ○ 日本における先行研究について

佐藤忠男は「木下恵介という人は、論理によってではなく、感覚によって事の善悪を判断する人であり、しかもこの感覚は異様に鋭敏で、また、殆ど傲岸とっていいくらいの自信に支えられている」<sup>⑧</sup>と述べています。三国隆三は1998年9月に亡くなり、映画監督の山田洋次はその訃報に接し次のように述べています。「戦後の日本映画の華やかなりし時代を、木下さんと黒澤さんの二人の監督が、まるで双頭のワシのように力強くリードしていたこと、そして二人のマエストロ（巨匠）がいつまでもお元気だったことが、後輩にとってどれほど力強かったかを、今しみじみ思う」<sup>⑨</sup>と述べています。また、作品について「四十九にも上る作品群を生み、多彩で千変万化であった。しかも、一貫して家族や親子関係をテーマとし、日本的叙情性の中にリアリズムを追求し、平和の大切さと、庶民の哀歓を描き続けた」と述べています。佐々木徹は「木下恵介の監督作品は、現代劇から時代劇、悲劇もあれば喜劇もあって多種多様、そこにはさまざまな人間が登場するが、共通するのは、自分の力ではどうしようもない、ある哀しみを背負った人間が描かれているということである。戦争という非常事態は、個人の運命に大きな影響を与える。しかし、戦争がなくとも、人はいつでも与えられた自分一人の命を生きる以外にないのである」<sup>⑩</sup>と述べています。また佐々木は「自然ということでは、木下恵介のロケは、空の気配や雲の様子を重視した。……とくに俳優にたいしては、細かい演技指導はせず、内から自然にあらわれるものを待った」<sup>⑪</sup>と述べています。波多野哲朗は「木下独特の様式、木下像は、戦後期の映画にかぎらず、戦中の映画も、また後期の映画をも貫いているのであった。そこでは家の舞台はいつも一つの家、あるいは一つの小規模な共同体に据えられている」<sup>⑫</sup>と述べています。また「内部の人々にとって、外部からの動因はあたかも抗らうことのできない宿命であるかのように、不条理にあるいは突然やってくるのである」とも述べています。妹の楠田芳子は「恵介兄はいつも着る物を買ってきてくれました。あるいは洋服とかセーターとか、浜松にはないようなお洒落なものを買ってきてくれるので、それが楽しみでした。(中略)また、兄は家族愛、夫婦愛を大切にしました。どの作品も底にはヒューマニズムが流れていました」<sup>⑬</sup>と述べています。



○ 中国における先行研究について

1949年10月新中国創立後、中国は日本との友好交流に力を入れてきました。1966年から1976年まで続いた文化大革命を除いて、日本映画展を行い、今井正、黒澤明、木下恵介、野村芳太郎、新藤兼人、山本薩夫、小津安二郎、今村昌平、大島渚などの作品が紹介され、一般公開されました。木下恵介監督とその作品は、新中国成立後の1956年に開催された「日本映画展」で、「二十四の瞳」、1983年10月の「日本映画展」では、「大曾根家の朝」、「カルメン故郷帰る」がそれぞれ一般公開されました。<sup>⑭</sup>

「大曾根家の朝」は、1946年に公開され、監督における戦後第一作でした。亡くなった大曾根教授の家で、未亡人の房子と3人の息子、一人娘悠子が穏やかな暮らしを送っていましたが、1943年12月下旬、日本軍の敗色が濃厚となり、国内では徴兵の数が増強され、娘の婚約者が出征することに加え、長男が政治犯として逮捕されるなど、傍若無人の扱いを受けると共に、厳しい環境に置かれるようになりました。教授の弟一家の家屋が空襲で焼け、弟は居そうろうすることになりました。弟の一成は軍人で、三男の出征を独断で決めたり、悠子に婚約者との婚姻解消を迫り、軍需会社の社長の息子との結婚を押しつけました。房子のわが子を亡くした悲しみの気持ちを顧みないばかりか、情報を得て、軍需のお米を大量に入手しました。房子は義理の弟の傲慢に耐えきれず、彼を家から追い出すことに成功しました。1946年「大曾根家の朝食」は『キネマ旬報』ベストワンに選ばれ、戦後日本初の反戦映画と位置付けられています。<sup>⑮</sup>1954年の「二十四の瞳」は、戦争を主題にした作品で抒情作品の代表作とされています。中国で公開されたのは1956年6月に行われた「日本映画週間」において同時上映された「太陽のない街」、「最後の女達」、「愛すればこそ」、「ここに泉あり」などの左翼映画と異なるにも関わらず、大ヒットしました。中国共産党の機関紙「人民日報」をはじめ、多くのメディアに取り上げられ、「日本軍国主義政策は、中国人民に災難をもたらした」という中国の公式の見解を具現化したものとして、きわめて高く評価されました。「それまでほとんど知らされなかった軍国主義政策の被害者としての日本の庶民の姿を、生々しい映像として目の当たりにすることによって、当時の中国の観客の中に、かつての侵略・支配国家であった日本に対する親近感が芽生えたにちがいません」<sup>⑯</sup>と述べています。

この年この作品は「キネマ旬報」のベストテンの第一位に選ばれ、中国でも大好評でした。

香港の日本映画研究者の湯禎兆は、「木下恵介はセンチメンタルで抒情的だというのが、第一印象でした」<sup>⑰</sup>と述べています。

## VI まとめ

戦後、日本の映画復興や発展に大きく貢献してきたにも関わらず、木下恵介監督は現在は忘れられています。しかし1978年改革開放の実施によって経済発展の道を歩み続けている中国は、改革開放から40年近く経った現在、民衆は生活が大きくレベルアップしていると同時に、その反面、経済的發展に伴う社会的に歪み（精神的充足感の欠乏、人間的絆の崩壊など）が拡大しつつあります。それらの課題に最大の関心を寄せているのが木下恵介監督の映画であり、木下作品に学ぶ必要があると思われます。

次に木下恵介作品から具体的な場面を紹介することにします。二つの場面ともに庶民が持つ人情の機微について克明に描いていると判断できます。

（「花咲く港」（1943年）より）

B 渡瀬先生は奥様もお子様もいなかったような。

A あのころの先生は独身でいらしたから、お子様があるとすると、そのあとのことよね。

（中略）

B 岡野さんは、この島にきた渡瀬先生に惚れてしまった。

岡野 話しださないでください。

B いいじゃないか。後でテナンまで追っていったよ。

C これは大昔話ね。

A ねえ、岡野さん、10年ひと昔。もうそろそろ私たちに打ち明けるいい時ですよ。

岡野 渡瀬先生を自分のものにしていれば、今はテナンかシンガポールあたりで先生の御墓を守って、幸せに暮らしているに違いないわ。

B それじゃ、岡野さんは失恋したわけじゃないか。

岡野 先生は私に見向きもしなかったからです。私はテナンで稼いで稼ぎまくって、貯めたお金を持って帰ったことです。

C なるほど。(真剣な顔でうなづく)

岡野 私は今でも先生のことを・・・(苦笑い)。それにもうこの年だし、せめて坊ちゃさまを心から歓迎申し上げるつもりです。

(「日本の悲劇」(1953年)より)

佐藤 お姉さん、またどうした。一人で黙って座って。飲みたいなら、思い切って飲めばよい。あそこでこっそり飲むじゃない。主人がみつけるよ。団体客が大事だからね。

春子 分かったよ。すぐ行く。

佐藤 首にされるよ。

春子 どうでもいいよ。生きるのがつまらなくなった。

佐藤 あ、そう。

おばあさん 今日佐藤さんのお母さんが来て、数か月送金してないって。かわいそうなお母さん。お金をあの女にあげたんじゃない。

春子 佐藤さん、親子孝行しないとだめよ。

佐藤 うるさい。

(中略)

佐藤 まだ寝ないですか。寂しかったら子どもに手紙を出せばいいですよ。はい、いっぱいでも飲みましょう。春子、たまには怒ったりしたが、許してもらえますね。私もやっと分かりました。あのような女とは付き合っていけないって。本当にすまなかった。

春子 息子も離れていき、娘にも離れて行かれた。

佐藤 泣かないでくれよ。これから優しくしてあげるから。

春子 お母さんに冷たかったら、罰当たるよ。

佐藤 昨日母に仕送りましたよ。

春子 立派なコックになるのよ。

佐藤 はい。きつとなれるよ。心配しないで。

春子 組板の修行は20年で立派になれると言われていないか。貴方はまだ6,7年しか経ってないじゃないか。まだまだだよ。若いから時間がいくらでもあると思っただけよ。お母さんはどんなに貴方のことを期待しているか知っているね。

佐藤 きつと頑張るよ。小学校の時成績が良くて、いつも先生に上へいけと励まされていた。親の負担を減らすため、歯を食い縛って退学しこの業界に入ってきたんだから。あの時はよく泣いた。今になって前に向いて歩くしかないじゃないか。春子、もう泣かないで。泣いても仕方がない、前に向くじゃないか。

木下恵介監督はデビュー作の「花咲く港」(1943年)から「陸軍」(1944年)、「二十四の瞳」(1954年)、「悲しみも喜びも幾たびの歳月」(1957年)、「楢山節考」(1958年)などの数々の名作を製作し、後期の「衝動殺人事件 息子よ」(1979年)などを含め全49本の映画作品の中で終始主張してきたテーマは、普通に暮らす庶民に目を向け、幸せな生活を願うところにあります。日常の困難を乗り越える知恵や力、癒し、元気を与えるなどは木下作品としての特質と言えます。そのような木下恵介の映画作りや特質は、今の中国で求められている映画の課題に対し、手掛かりを与えてくれるに違いありません。

## 《注》

①「中国电影产业合拍片发展与现状」(<http://wenku.baidu.com/view/6321ed5676c66137ef06192e.html>)

②『証言 日中映画人交流』(2011年4月 P198 集英社新書)

③『中国10億人の日本映画熱愛史—高倉健、山口百恵からキムタク、アニメまで』(2006年8月 P76 集英社新書)

- ④『日本中を泣かせた映画監督 木下恵介伝』(三国隆三 1999年4月 P8 展望社)
- ⑤『KEISUKE 木下恵介記念館』(齊藤卓 2011年3月 P3 木下恵介記念館)
- ⑥『天才監督 木下恵介』(長部日出雄 2013年5月 P548 論創社)
- ⑦『木下恵介の世界 愛の痛みの美学』(佐々木徹 2007年5月 P1 人文書院)
- ⑧「木下恵介論」(『シナリオ』巻3号 1958年1月 p31 シナリオ作家協会)
- ⑨『日本中を泣かせた映画監督 木下恵介伝』(1999年4月 P1 展望社)
- ⑩『木下恵介の世界 愛の痛みの美学』(2007年5月 P1 人文書院)
- ⑪「叙情と郷愁—木下恵介とその時代—」(『追出門学院大学文学部紀要第36号』2000年12月 P113)
- ⑫「木下恵介の『家』 木下映画はなぜ忘れられたか」(『キネマ旬報』1262号 1998年8月 P90 キネマ旬報社)
- ⑬「兄・木下恵介の家族愛」(『潮』481号 1999年3月 P344 潮出版)
- ⑭『証言 日中映画人交流』劉文兵 2011年4月 P12 集英社新書)
- ⑮『北京・上海・長春 日本映画回顧展』1985年10月 中国電映資料館)
- ⑯『証言 日中映画人交流』劉文兵 2011年4月 P198 集英社新書)
- ⑰『日本映画驚奇』2008年12月 P52 広西師範大学出版社出版)

## あとがき

論文完成にあたり感無量と同時に、長野県短期大学の先生方々への感謝の気持ちでいっぱいです。そもそも論文が苦手な私は、大学の専攻日本語だけでは不満足に思い、社会人になってファッションなど新しい分野に挑んできました。デザイナーを目指して日本留学も経験しましたが、帰国後北京放送に入局。ファッションの道を諦めたものの、視野が広がった楽しさを覚え、今度は中国と日本の映画の世界に入ることになりました。修士課程を終え、修士号論文は、先生の勧めで日本の木下恵介映画監督にしました。以来5年経ちましたが、切り口に困り迷うまま、長野県短期大学の客員研究員にお招きいただきました。指導教官の張勇先生が相談に積極的に乗っていただきました。木下恵介監督が取り上げているテーマは、現在の中国の課題と一致しているのではないかというアドバイスをいただき、目からうろこが落ちました。木下恵介監督の作品の再鑑賞、論文の収集、木下恵介記念館の見学など、再スタートしました。何とか論文に手をつけることができました。張先生のアドバイスなしでは、引き続き門外でさまよい続けていたのではないかと思います。

また、日本語日本文化専攻の清水登先生が、論文について日本語を丁寧に訂正するだけでなく、内容的にもご指導くださいました。自分の主張がもっと鮮明になり、喜びを感じると同時に、論文を書く楽しさを味わうことができました。健康栄養専攻の中澤弥子先生は、紀要の投稿カードの書き方など、論文提出の方法について、細かく指導してくださいました。お蔭で、段取りよくスムーズに進めることができました。さらに、図書館では柳沢先生をはじめスタッフの皆さんが、資料の検索や国立図書館の資料のコピーなどを手伝ってくださいました。論文完成に、大変役に立ちました。

上記の県短の先生の方々の熱心で厳しいご指導のおかげで、数年間迷い停滞していた論文を、やっと書き終えました。ほっとする一方、感謝する気持ちでいっぱいです。帰国してから内容を充実させ、中国語の直し、修士号論文として提出致します。また、両国の映画交流に役立てればと思っています。長野県短期大学の先生方々、誠にありがとうございました。